
バカとI S とガンナーと召喚獣

直井刹那

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バカとISとガンナーと召喚獣

【Nコード】

N5267Y

【作者名】

直井剎那

【あらすじ】

この小説は『バカとテストと召喚獣』の二次創作です。

オリ主が幼馴染の明久や

Fクラスメンバーの秀吉、雄二、ムツリー二等や

Aクラスから翔子や優子、愛子たちのメンバーと

ISから一夏や箒、シャルロット、鈴、セシリア、ラウラたち

IS操縦者も加入して楽しく可笑しく毎日を過ごしていく物語です。

明久×瑞樹・明久×美波じゃなきゃダメだ、

という人はバックしてください。

そしてあまり姫路と島田の出番が少ないかもしれません。
皆さんの感想お待ちしていますm(_____)m

前置き

この小説は『バカとテストと召喚獣』の二次創作です。

オリ主が幼馴染の明久やFクラスメンバーの秀吉、雄二、ムツリー
二等や

Aクラスから翔子や優子、愛子たちのメンバーと

ISから一夏や篤、シャルロット、鈴、セシリア、ラウラたちIS
操縦者も加入して

楽しく可笑しく毎日を過ごしていく物語です。

明久×瑞樹・明久×美波じゃなきゃダメだ、という人はバックして
ください。

そしてあまり姫路と島田の出番が少ないかもしれません。

皆さんの感想お待ちしていますm(_____)m

設定

設定・変更点

- ・文月学園は世界に1校しかない科学とオカルトが融合した学園。
- ・オリ主が明久たちバカテスメンバーやISメンバーと学園生活を面白おかしく過ごしていきます
- ・明久はもちろんの事、観察処分者です。
- ・ISのメンバーは召喚獣がISの装備になっています。
- ・明久は姫路に恋心を抱いていない。
- ・明久は健康的な食生活をしている。

また書いているうちに変更する場合があります。
それでも良い方は呼んで頂けると嬉しいです

〕 召喚戦争のルール 〕

1、原則としてクラス対抗戦とする。各科目担当教師の立会いにより試験召喚システムが起動し召喚が可能となる。

なお、総合科目勝負は学年主任の立会いのもとでのみ可能。

2 年学年主任：高橋洋子

西村 宗一 に関しては全教科、総合科目での勝負の立会いを可能とする

2、召喚獣は各人1体のみ所有。

この召喚獣は該当科目において最も近い時期に受けたテストの点数に比例した力を持つ。

総合科目については各教科最新の点数の和がこれにあたる。

3、召喚獣が消耗するとその割合に応じて点数も減算され、戦死に至ると0点となり、

その戦争を行っている間は補習室にて補習を受講する義務を負う。

4、召喚獣はとどめを刺されて戦死しない限りは、

テストを受けなおして点数を補充することで何度でも回復可能である。

5、相手が召喚獣を喚び出したにもかかわらず召喚を行わなかった場合は

戦闘放棄とみだし、戦死者同様に補習室にて戦争終了まで補習を受ける。

6、召喚可能範囲は、担当教師の半径10m程度（個人差あり）。

7、戦闘は召喚獣同士で行うこと。

召喚者自身の戦闘行為は反則行為として処罰の対象となる。

8、戦争の勝敗は、クラス代表の敗北をもつてのみ決定される。

この勝敗に対し、教師が認めた勝負である限り、経緯や手段は不問とする。

あくまでもテストの点数を用いた『戦争』であるという点を常に意識すること。

9、クラス間同士での同盟など自由で戦争も有。

例) 元がFクラスV S Bクラスであつて

途中でBクラスがCクラスに同盟組んだ場合、

FクラスV S Bクラス& Cクラスが可能となる。

ただし、この場合もしBクラスの代表が討たれた場合Cクラスも負けとなる。

よつてFクラスはB又はCクラス好きなほうの設備を手に入れることができ、

B・CクラスはFクラス設備となる。

） 試験科目について ）

【 科目 】

・現代国語	・数学	・保健体育
・古典	・化学	・英語
・世界史	・物理	・現代社会
・日本史		

以上、計10科目に設定しています。

総合科目は上記の全ての点数の和とし、

召喚獣の腕輪は各教科400点以上の時に装備される。

総合科目では4000点の時装備される。

各クラスの総合科目の点数

・ Fクラス	1 0 0 0 点以下
・ Eクラス	1 0 0 0 ～ 1 3 0 0 点
・ Dクラス	1 3 0 0 ～ 1 6 0 0 点
・ Cクラス	1 6 0 0 ～ 1 9 0 0 点
・ Bクラス	1 9 0 0 ～ 2 2 0 0 点
・ Aクラス	2 2 0 0 点以上

こんな感じに考えてます。

ただし、A～Eクラスは定員50名となっているので
Eクラス並の点数でもFクラスになる可能性がある

設定（後書き）

調子に乗って投稿しました。

今回は長続きできるよう頑張りたいと思います。応援よろしく願います。

オリキャラ紹介

かざまたくと
風間拓斗

- ・身長：178cm
- ・誕生日：7月7日
- ・一人称：俺
- ・あだ名：タクト、拓斗
- ・趣味：ゲームや漫画（軽いオタク） 明久の影響
 - ・好きなこと（もの）：友達（特に明久）、食べ物（特にお菓子）、明久の料理
- ・嫌いなこと（もの）：友達を傷つけるヤツ、姫路の料理^{トラウマ}
- ・特技：射撃
明久をバカにするヤツ

特筆事項

- ・一応本作の主人公。
- ・見た目はスタードライバーのツナシタクトで髪の色が黒である。

- ・明久や姫路とは小学校からの付き合い。
- ・小学生の頃はいじめられっこだったが明久に助けれたことがある。

それ以降明久と仲良くなった。その時今度は明久を助けたい
と思いい体を鍛えている。

また、姫路の殺人料理の1番最初の被害者。

たまたま小学校の調理実習の時同じ班だったので食べた事がある。

- ・家族構成は父親・母親・祖父・兄がいる。

父は探検家で現在は母と共に海外にて冒険中。

また祖父は世界で知らないものはいないといわれる

大企業の社長である。なのでよくお小遣いやお菓子が届けられる。

兄は祖父のところで働いている。次期社長といわれている。

- ・家は明久の家（部屋）の隣の家。

本人が料理できないので明久と一緒に食事をしている。

- ・体を鍛えたので雄二以上武力をもつ。

また銃の扱いがピカーで常に改造エアガンを2丁仕込んでいる。

改造エアガンの威力は普通のエアガンと比べると威力が全然違う。

成績も翔子には少し劣るが学年次席の成績をもち文武両道である。

- ・時々まじめだが時々フリーダムな男

- ・鞆の中にはお菓子がたくさん入っている。休み時間などによく食べている。

- ・空腹状態が長く続きと暴走する事がある。

- ・文月学園では1年の時は明久たちとは違うクラスで翔子や優子と同じクラスだった。

- ・観察処分者である。

振り分け試験の時明久が倒れた姫路をつれて退出した時に、教師の1人が明久の事をバカにしたので仕込んでいたエアガンで

ンで

その教師をブツ飛ばしたから。

他にも理由があり、時々早退して

アニフェスやケーキバイキングなどに行ったことがあるため。

< 召喚獣 >

防具：ガンダム00のケルディムガンダムGNHW/R。

武器　・スナイパーライフル

銃身を折りたたむことで、
取り回しと連射性能に優れた3連バルカンモード
に変形する。

される。

- ・ビームピストル

左右の背部に1挺ずつ懸架されたビームピストル。
接近戦用にコーティングを施した銃剣が設置され
ている。

とができる

できる。

- ・ミサイルポッド

腰部フロントアーマーに内蔵されているミサイル
ポッド。

2連装のポッドを左右各2基ずつの4基、
合計8発のミサイルを内蔵している。

- ・シールドビット

遠隔操作が可能なシールド。
シールドを自在に分散、密集させることで、
多方向からの攻撃に対応できる。

左肩に2基、両膝に2基、背中に7基の計11基
が装備されている。

各ビットにビーム砲が内蔵されており、
4基を格子状に配置した「アサルトモード」では、
より強力なビームを発射することができる。

- ・ライフフルビット

シールドビットよりも大型の遠隔誘導兵器。
右肩に2基、太陽炉に4基の計6基を装備する。

離を持ち、

1基でスナイパーライフルと同等の威力と射的距

右肩の2基は固定砲塔としても機能する。

シールドビットと同様に、盾としても使用できる。

召喚時に任意で装着可能。

腕輪の能力

『トランザム』

・召喚獣の能力が30分間大幅にUPする。

30分経過すると効果が自動的にきれ、

能力が10分間元の1/2落ちる（点数も）

・使用時は召喚獣の体や装備の色が赤く染ま

る。

ブローグ　＼振り分け試験当日＼

『試験召喚システム』――

科学とオカルトの偶然により完成されたそれは
テストの点数に応じた『召喚獣』を呼び出し戦うことのできる
最先端システムである。これは世界でもこの学園でしかまだ確認で
きていない。

その召喚獣を用いたクラス単位の戦争――

それが『試召戦争』――試験召喚戦争である。

試験によりクラスがAクラス～Fクラスにまで振り分けられる。
振り分け基準は勿論テストの点数である。

頭が良ければAクラス、そこからB、C、D、Eと下がっていき、
最も頭が悪ければFクラスとなる。

更にこのシステムが運営されている、
この『文月学園』では、テストの上限がなく、クラス毎に設備が変
わる。

Aクラスでは、ノートパソコン、個人エアコン、冷蔵庫、リクライ
ニングシートなどの

設備が整っており、全て学園側から支給される。

一方Fクラスはというと、机は卓袱台、椅子は座布団、チヨークす

ら用意されていなく、
蜘蛛の巣がはっついて、カビ臭い。

しかしそんな設備も『試験召喚戦争』により変えることができる。

下位のクラスは上位のクラスに勝てば施設を交換できる。
逆に負けた場合は施設が一段階悪くなる。

今日はそんな学園のクラス分けテストの日……
俺は試験を受けていた

教師「それではクラス振り分け試験始め！！」

教師の合図で全員がテストをめくる。

明久「（難しいと噂の試験だけどこの程度なら10問に3問程度なら解ける！！）」

ここに、試験に取り組む少年がいた。彼は吉井明久という。
明久は俺と小学校からの親友である。

『ガタンッ！！』

突然明久の近くで誰かが倒れた。

明久「ひ、姫路さん！？」

明久は席を立ち、姫路に駆け寄る。

教師A「吉井！！試験中だぞ、席につけッ！！」

明久「でも、姫路さんが…」

教師A「姫路、…体調が悪いなら保健室に行くか？

ただし試験中の退室は『無得点』扱いとなるがそれでいいかね？」

明久「ちよっ！！具合が悪くて退席するだけでそれは酷いじゃないですかっ！！」

姫路「……た、退席します…」

教師A「では姫路、お前は無得点だ」

姫路「……はい…」

明久の必死の抗議も聞き入れてもらえず、結局姫路は無得点扱いに。ちよつと理不尽すぎやしないか？こんな事で無得点なんて。

姫路「失礼………しま………あ……！」

明久「っ！姫路さんっ！」

フラフラしながら教室を出ようとする姫路さんがバランスを崩し、咄嗟に明久が支える。

明久「姫路さん掴まって。僕が保健室まで付き添うから」

姫路「よ…吉井くん…、でも…」

教師A「吉井、何をしている！早く席に戻れ！！」

明久「こんな状態の姫路さんを放っておく事なんて出来ません！」

教師A「貴様も無得点扱いにするぞ！？」

明久「ご自由に。姫路さん、行こう」

教師A「待て、吉井！！」

『ピシヤッ！』

先生の言葉を気にも止めずに、明久は姫路さんを連れて教室から出ていった。

……そうだな、明久はそんなヤツだからな。

自分が大事だけどそれ以上に周りの人を大事にする人…。

そんな明久だから、俺はアイツの親友でいられるんだ……。

（さて、そしたら俺はどうするかなあ…）

正直クラスなんてどこでもいいしな。

明久と同じクラスであればどこでもいいし。

いつそ名前無記入で出すかなあ…。

と、そんな事を考えていたら…。

教師A「チツ、クスが……」

……あ？

気のせいだろうか……。この教師、今小声で許しがたい言葉をほざいた様な……。

教師A「まったく、バカの考える事はよくわからん」

……。

ガタッ！

教師A「ん？何だ風間、お前も無得点にされたいのか!？」

何か言ってるみたいだけど全然聞こえない。

今、俺にはテストよりも大事な事しないといけないことがある。

何かって？それは。

『ツカツカ』

教師A「な…、何だ!？」

「（ニヒッ）」

カチャ

『バンッ！！』

教師A「ぐぼおっ！？」

俺は懷から隠し持っていた改造エアガンを取り出し教師の腹をゼロ距離で撃った。

その後教師の顔を1発殴り、

拓斗「すいません。気分悪いんで早退します」

悶絶してる教師と啞然としてる他の生徒に一瞥もくねず、俺は拳を振りながら教室から出ていった。

プロローグ　～始業式～

俺達が文月学園に入学してから2度目の春が訪れた。

校舎へと続く坂道の両脇には新入生を迎える為の桜が咲き誇っている。

別に花を愛でるほど雅な人間じゃないけど、その眺めには一瞬目を奪われる

はずだった

明久「遅刻だぁー！っ！！」

それは、俺達は初日の始業式から、いきなり遅刻しそうになってるからだ。

何故こんな事になったかというと

拓斗「そろそろ時間だから明久を起こしてに行くか」

俺、風間拓斗は吉井家とは昔から仲が良く食事は明久に作ってもらっている。

ちなみに家は隣。

今日は文月学園2度目の始業式の日である。

拓斗「明久朝だぞ！起きろぉー！！！！」

明久がいつものように起こされていたのが始まりだ。

始業式当日の今日の朝方までゲームをしていたらしく全然起きなく、
やっと起きたと思ったたら何故か昔の姉の制服を着ており、
また着替えるという作業をしていて気づいたら時間がヤバいという
ことだ。

拓斗「これというのも、お前が寝坊して間違って姉の制服なんか着
るからだぞー!!」

明久「ご、ごめん。ゲームのキリがなくなくてさ」

拓斗「昨日あれほど言ったじゃないか！

せめて始業式の日ぐらいは遅刻しなくなかったのに」

というわけで俺達は学園へと続く坂道を登っている。

坂道を登りきると

西村「吉井、風間遅刻だぞ」

……ドスのきいた声に呼び止められた。

明久「あ、鉄じー！ー西村先生、おはようございます」

拓斗「鉄村先生おはようございます!」

鉄人「吉井兄、今鉄人って言わなかったか？

それと風間は鉄人と西村を混ぜただろ」

明・拓「ははっ、気のせいですよ」

鉄人「ん、そうか？……まあいい。」

あっいいんだ。

鉄人「それよりお前ら普通に『おはようございます』じゃないだろ」

明・拓「今日も肌が黒いですね」

鉄人「……お前らは遅刻の謝罪よりも俺の肌の色の方が重要なのか？」

明・拓「そつちでしたか。すみません」

鉄人「まったくお前らは……まあいい。ほら、受け取れ」

鉄人が俺達に封筒を差し出してくる。

宛て名欄には大きく僕らの名前が書いてあった。

拓斗「あ、クラス分けの紙ですか。どーもです」

明久「僕、思っただんですけど、どうしてこんな面倒なやり方でクラス編成を

発表しているんですか？掲示板とかで大きく張り出しちゃえばいいと

思っんですけど」

西村「普通はそうするだけだな。まあ、ウチは世界的にも注目されている

最先端システムを導入した試験校だからな。
この変わったやり方もその一環ってワケだ」

明久「ふーん。そういうもんですかね」

西村「今回の事は他の先生方から聞かせてもらった。吉井」

明久「はい」

西村「俺個人の考えとしては、お前の行動を褒めてやりたい。
出来ればもう一度チャンスを与えてやりたい。だがルールは
ルールだ」

明久「はい。大丈夫です、後悔してませんから」

西村「そうか…、ならいい」

明久は微塵も後悔していない。真っ直ぐな視線で鉄村先生にそう伝えた。

さすが明久だな。

西村「だが、問題はお前だ風間！」

拓斗「ええっ！？俺！？」

突然鉄村先生に呼ばれて我に帰る。俺が何をしたと？

西村「いくら大事な幼馴染みがバカにされたからといって、
教師を殴り飛ばすとは何事か！！」

明久「ええっ！？タクトそんな事したの！？」

拓斗「何言ってるんですか！寧ろ2発で済ませた事を褒めてもらいたい位です！」

本当だったら病院送りにしてやりたい位ですよ！？」

西村「その2発で殴られた先生は病院送りになったのだが？」

拓斗「あれおかしいな？手加減した気がするのに」

まああの時、頭に血が上ってて手加減しなかったからな……。
……スツキリした事は黙っておこう……。

明久「八雲だめだよ。怪我なんかさせちゃ……」

西村「吉井の言う通りだ。解ったら少しは反省して」

明久「ばれない様にしないと」

八雲「そうだな。今度からはそうする」

西村「違う！とにかくっ！風間には今後、嚴重な監視が必要だと
先日の職員会議で決定した」

そう言いながら鉄先生は懷からさっきとは別の封筒を取り出し、
俺に差し出してきた。

西村「受け取れ、これがお前に対する罰だ」

拓斗「何ですかコレ？」

西村「見れば分かる」

封筒を上から破って、中の紙を開いた。

明久「ちょ…、タクト…！？」

後ろから覗き込んでる明久が動揺してるみたいだけど、俺は意外とすんなり受け入れる事が出来た。

まあ予想はしてたし、当然といえば当然だしな。

風間拓斗

上記の者を文月学園指定《観察処分者》として認定する

。

こうしてボクたちの二年目の高校生活が、幕を開けた。

ブログ ～自己紹介～

明久「……なんだろう、このばかデカイ教室は、

ここ本当に教室？高級ホテルのロビーにしか見えないんだけど」

拓斗「個人エアコン、冷蔵庫、リクライニングシート、その他もろもろ豪華な品々…

本当に勉強する環境か？ここは」

明久「…教室の設備に色々と突っ込みたいけど、これ以上の遅刻はマズイし、

僕達も教室に行こうよ！」

拓斗「ああ、そうだな」

そうして僕らはFクラスに向かう。

明久の言う通り、その教室には 2 - F と書かれたプレートが掛かっていた。

明久「じゃ、僕から入るね」

拓斗「了解」

ガラッ

明久「ごめんなさい少し遅れました」

雄二「早く座れ！！このウジ虫や！？」

拓斗「よっ雄二！今、何て言った？撃つぞ」

僕は雄二に向けてエアガンを構える。

雄二「な！？拓斗か！い、今は言葉のアヤだ。

ってなんでお前がFクラスに？お前ならAクラス入り確定だろうが」

拓斗「まあ色々あってな。

だけどAクラスより明久やお前らと一緒にいたほうがいいしな」

雄二「お前らしいな」

と、その時。

福原「えーと、ちょっと通してもらえますかね？」

不意に背後から覇気のない声が聞こえてきた。

そこには寝ぐせのついた髪にヨレヨレのシャツを貧相な体に着た、いかにも冴えない風体のオジサンが居た。

福原「それと席に着いてもらえますか？HRを始めますので」

拓斗「りょーかい」

明久「はい、わかりました」

雄二「うーっす」

俺たちは人はそれぞれ好きな席に向かう。

ちなみに俺は明久の隣で雄二の後ろの席だった。

福原「えー、担任の福村慎です、よろしくお願いします。」

教壇に立った福村先生は自己紹介をし、

黒板に名前を書こうとしたがその手を止めた。理由はチョークがないからである。

福原「皆さんに卓袱台と座布団は支給されてますか？」

不備があつたら申し出て下さい。」

明久「これで不備がないって言う人に会ってみたいよ」

拓斗「それは俺も同感だな」

それもそうだろう。机と椅子はなく、あるのは卓袱台と座布団。さらに天井にはクモが巣を作り、畳は痛み、窓ガラスは所々テープが貼られている。

F「せんせー、俺の座布団綿がほとんど入っていません」

福原「我慢してください」

F「先生、俺の卓袱台の脚が折れてます」

福原「木工ボンドが支給されますので自分で直してください」

F「センス、窓が割れてて風が寒いんですけど」

福原「わかりました。後でビニール袋とセロハンテープの支給を申請しておきましょう」

それに関する苦情が次々と生徒から寄せられるが先生は我慢してくださいか、自分で何とかしてくださいぐらいしか言わない。

福原「では自己紹介でも始めましょうか。廊下側の人からお願いします。」

スクツ

秀吉「木下秀吉じゃ。演劇部に所属しておる。」

そのまるで男とは思えない容姿にFクラスの面子は思わず見とれた。けど秀吉は男なんだが……次はその前の少年が立った。

康太「……………土屋康太」

次に自己紹介したのは小柄な体の少年―土屋康太だ。

彼はムツツリーニというあだ名を持っているが本名よりもそっちの方が知名度が高い。

秀吉と康太とは去年からの付き合いだ。

島田「島田美波です。海外育ちで日本語は会話できますけど読み書きが苦手です。」

あ、でも、英語も苦手です。趣味は」

ポニーテールで勝ち気な印象を与える少女ー島田美波は一回区切り、

島田「吉井明久を殴る事です。」

島田が明久に向かって手を振っている。

おい島田、明久が震えているぞ。

大丈夫だ明久。もし手を出そうものなら俺が処理する。

次々に自己紹介がすんでいき次は明久の番になった。

明久「ーコホン。えーっと吉井明久です。気軽にダーリンと呼んでくださいね。」

次の瞬間、

F「「「ダアアーリーーン!!。」」」

野太い男の大合唱。

明久「・・・・・・・・失礼、忘れてください。

とにかくよろしく願いします」

拓斗「・・・・・・・・明久」

明久「ごめん。まさかあんな反応するとは思わなかったんだよ」

おっ、次は僕の番だな。

拓斗「風間拓斗だ。これからよろしく頼む。」

特技は銃を扱う事で、狙い撃ちや早撃ちが得意だ。趣味はゲームや漫画。

そしてお菓子が大好きだ。だから何かくると嬉しい。あっそうだ。先に言うておくが明久に手を出したら

ガシヤ

俺は隠し持っていたエアガンを取り出し構えると

拓斗「生きて返さないから、そこをよく覚えておいてくれ」

[illegible]

Fクラスの皆はエアガンを見て大人しくなった。

再び自己紹介が続いていく。

「夏、織村。夏です。よろしくお願いします」

へゝあんなヤツも俺達のクラスなんだ。

どんな自己紹介するんだ。

一夏「以上です」

ガクツ

それだけか！

少し期待していたのに……
周りを見てみるとあまり興味がなかった。
俺だけか？

第「篠ノ之箒だ。よろしく頼む」

また名前だけの自己紹介か。

まあ皆それだけみたいだからいいのか？

ブローグ　これがFクラス

自己紹介が進んで言っていると

？「あの、遅れて、すいま、せん。」

F「「え？。」」

全員がその声の方に目を向けるとそこには1人の女子生徒がいた。

福原「ちょうど好かったです。今自己紹介をしているところなので、

姫路さんもお願ひします」

姫路「は、はい！　あの、姫路瑞希と言います。よろしくお願ひします！」

途中から尻すばみな自己紹介を終えて、小柄な体を縮み込ませた。

F「はいつ、質問です！」

姫路「あ、はいつ。なんですか？」

F「何でここにいますか？」

傍から見れば失礼な質問だが、ほぼ全員がそう思っていた事だった。彼女は容姿も人目を引く程で、1年次のテストでは1ケタの順位に必ず名を連ねている学力の持ち主でもある。

当然こんな場所に来るべき人間ではなく、最高設備であるAクラスに入っている物と誰もが思う事。

だからこそ、この質問はある意味必然なものだった。

姫路「そ、その……振り分け試験の最中、高熱を出してしまいました……」

AからFまでのクラス分けは、学年末に行われる振り分け試験で決まる。

その試験は難しいという評判だが、途中退席は0点扱いにされるという厳しいテストである。

F「そういえば、俺も熱（の問題）が出たせいでFクラスに」

F「ああ、化学だろ？ あれは難しかったな」

姫路の言い分を聞いて、1人がそう言いだした。
それを皮切りにざわつき始め、次の言い訳が飛び交う。

F「俺は弟が事故に遭ったと聞いて、実力を出し切れなくて」

F「黙れ1人っ子」

F「前の番、彼女が寝かせてくれなくて」

F「今年一番の大嘘をありがとう」

その様子を見て、俺は一言。

拓斗「……想像以上にバカが多いみたいだな」

それを聞いて、明久はうんうんと頷いた。

姫路「で、ではっ、今年1年よろしくお願いします!」

姫路は逃げるように、雄二の近くの空いてる席に着いた。

彼女は席に着くや否や、安堵の息について卓袱台に突っ伏してしま
う。

雄二「よう姫路、体調は大丈夫か？」

姫路「えーっと…、あなたは…」

雄二「坂本だ。坂本雄二。宜しく頼む」

姫路「あ、姫路です。宜しく願いします。」

深々頭を下げる姫路。

こーゆーところからでも彼女の育ちの良さが伺えるというものだ。

雄二「ところで姫路。体調の方はもう良いのか？」

明久「あ、それはぼくも気になる」

明久が気になり姫路に声をかけた

姫路「あ、明久君!？」

明久の顔を見て、瑞希が驚いた。

雄二「姫路、明久が不細工ですまん」

姫路「そつ、そんな事より、吉井君は全然不細工ではありませんよ？」

明久「え？」

姫路「目もパツチリしてるし、顔のラインも細くてきれいだし、その、むしろ……」

雄二「まあ確かに、悪くはないかもな。そういえば、

俺の知人にも明久に興味がある奴が居た気がする」

雄二のその言葉で明久は嬉しそうに、瑞希は驚いて、俺はまさかと言った様な表情に。

明久「え？ それって」

姫路「そつ、それって一体誰ですか！？」

明久の声を遮るかのように、瑞希が声を荒げた。それも必死そうな表情のオマケつきで。

雄二「確か、久保……利光だったか？」

拓斗「やっぱりか」

久保利光 性別（ / オス ） 現在Aクラス所属

雄二「おい明久、さめざめと泣くな」

拓斗「よりもよって男に恋愛感情持たれてるかも知れないなんて、普通はこうなると思うぞ？」

雄二「……まあ、確かにな」

パンパン！

福原「はいはい。その人たち、静かに」

バキッ！ パラパラパラ……

福原「してください……ね？」

本人としては、軽くだいたいたつもりだろう。

だが、壊してしまった事は事実の為、少々気まずそうな態度に。

福原「えゝ。代えを持ってきますので、皆さんは自習をしていてくださいね」

拓斗「どんだけ酷い設備なんだよ！？」

福原「これがFクラスです」

福原教諭の台詞に、何度目かの改めて設備のひどさを理解させられる面々だった。

明久「うん……ねえ雄二、ちょっと良い？」

雄二「あ？」

明久は雄二を伴い、廊下へ。姫路が怪訝そうな顔をして見送り、俺に問いかけた。

姫路「吉井君と坂本君、どうしたんでしょうか？」

拓斗「何だ、明久が気になるのか？」

姫路「え？　いつ、いえ、そういうわけでは……」

拓斗「ふーん、じゃあそういうことにしとくよ」

俺は2人が出て行った廊下をちらりと見て、すくつと立ちあがる。
秀吉は俺を見て。

秀吉「なんじゃ、またお主ら3人で悪たくみかの？」

拓斗「さあな、どうだろうな。でも面白い事になりそうだな」

秀吉「やれやれ……まあお主らしいのう」

拓斗「だけど嫌いじゃないだろ」

秀吉「飽きはしないのう」

互いに笑いあって、俺は1人気取られない様廊下へ。
そしてゆっくりと建て付けの悪い扉を開いて……

雄二「つまり、姫路の為だろ？」

明久「そうだね、姫路さんには酷い環境だから、

改善してあげたいって気持ちはあるし心配なんだ」

雄二「優しい所は相変わらずだな」

拓斗「それが明久だろ。で、何面白そうな事話してるんだ？」

俺は立ち聞きをやめ、会話に加わる。

明久「拓斗！」

拓斗「俺にも一枚かませろよ。そんな面白そうな話、俺が乗らない訳ないだろ？」

それに明久の頼みなら断る理由がないからな」

明久はそれを聞いて感激し、雄二も不敵な笑みを浮かべた。

拓斗「で、雄二はなんで戦うんだ？」

雄二「世の中学力こそがすべてじゃないって事、その証明がしてみたくてな。

ってか拓斗も物好きだな……っと、先生が来た。入るぞ」

拓斗「それじゃFクラス代表のお手並み、拝見と行こうか？」

雄二「ああ、任せておけ」

俺と明久は、雄二に向けてグッと親指を立てた。

雄二もそれに倣い、同様に親指を立てる。

拓斗「それより明久、試召戦争を提案したからにはお前も頑張れよ

？」

明久「もちろんだよ」

翔一「ちゃんと勉強位教えてやるよ」

明久「お願いするね拓斗」

雄二「改めて言うが、お前も物好きだな。明久に勉強を教えるなんて」

拓斗「まあコレくらいなんともないな。

それに明久には食事面で世話になってるからな」

雄二「そうか」

そして俺達が教室の中に戻った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5267y/>

バカとISとガンナーと召喚獣

2011年11月27日12時48分発行